

115. 本邦における保育の『構造の質』に関わる実証的研究－縦断的保育士調査の自由記述分析を中心として－

ケアの倫理・ケア労働研究会 会長 川池 智子

概要

我が国における少子化対策の中核、四半世紀以上進められてきた保育所の増設・多様化を中心とする保育政策は、近年、OECD 先進諸国の保育政策の趨勢に範を得て、「量的拡大から質的向上へ」と重点を移行した。

本研究では「保育の質」の要諦は、子どもと保護者の一番近くで「保育を担う人」、保育士であるという視座にたち、【保育の質の諸側面（図1：2P）】の中の『構造の質』におかれた「人的環境」を注視した。そこで、『構造の質』について再考し、その要素である「人的環境」の構成を明らかにすることを研究目的とした。

研究の対象としたのは、東京都保育士実態調査の自由記述と保育士インタビュー・ウェブアンケートで得た保育実践エピソードである。分析した2万件余の自由記述から見えてきたのは厳しい労働環境にある保育士の“不安”と“やりがい”とその“葛藤”、そして「現場のことをもっと知ってほしい」という切実な思いであった。他方、保育実践エピソードから見出されたのは保育士の専門性の高さを実践を支える周りの環境であった。

両者のどちらから、保育職アイデンティティに連なる保育に主体的に向き合う意識と自負が感じられた。

それらをまとめる中で「保育実践を支える三層の構図」が可視化された。保育士が中心となって担う「保育実践」を「職員集団・保護者・地域とのつながり」が支え、その土台に「労働環境・学習環境・保育職アイデンティティ」を置く構図は、「保育の質」の向上のための、あるべき「人的環境」の構成を示唆するものであった。

研究目的の完遂を目途に「三層の構図」を仮説として研究を続ける。研究成果のブックレットは、研究と実践者をつなぐツールとして、また、保育士の仕事の価値を社会に発信するツールとして用いていく。

背景および目的

こども家庭庁が打ち出した「保育政策の新たな方向性～持続可能で質の高い保育を通じた子ども真ん中社会の実現へ～」（2025－2028）によって、「保育の量的整備から質的向上へ」という我が国の保育政策は本格化した。

「保育の質」の中核は、子どもと保護者の一番近くで「保育を担う保育士」であるという視座にたつ本研究では、OECD の報告書で提起された【保育の質の諸側面（図1：2P）】の中の『構造の質』の一つ、「人的環境」に注目した。※当該図は、『保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会』第一回（2018年5月）において提出された資料から引用したものである。「保育の質」の論議において比較的早い段階の図であるが、「保育の質」論を考究するために重要な図であると考えられる。ただし、「人的環境」の中の諸項目間の関係性がみえないこと、『構造の質』として「物的環境」と「人的環境」が並列して置かれていることには疑問がある。

そこで本研究は、保育士の保育の仕事に対する意識を通して『構造の質』について再考すること、「人的環境」の諸項目の構成を明らかにすることを目的として研究を進めることとした。

研究成果をもとにしたブックレットの作成も研究目的の一つであった。少子高齢社会において大きな役割を果たす、若い世代を支え育む専門職の価値の重要性の認識が広がることを願い、そのささやかな一助としての社会貢献を為すことをめざした。大望のための小さな“種まき”である。

質の側面	内容	具体的な説明・例
志向性の質	政府や自治体を示す方向性	法律、規制、政策等
構造の質	物的・人的環境の全体的な構造	物的環境（園舎や園庭、遊具や素材・教材等） 人的環境（保育者の養成と研修、保育者と子どもの人数比率、クラスサイズ、労働環境等）
教育の概念と実践	ナショナル・カリキュラム等で示される教育（保育）の概念や実践	（日本では、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示される保育のねらいや内容にあたる）
相互作用あるいはプロセスの質	保育者と子どもたち、子どもたち同士、保育者同士の関係性（相互作用）	子どもたちの育ちをもたらす、安心感や教育的意図等を含み込む、保育者や子どもたちの関係性
実施運営の質	現場のニーズへの対応、質の向上、効果的なチーム形成等のための運営	園やクラスレベルの保育計画、職員の専門性向上のための研修参加の機会、実践の観察・評価・省察の確保、柔軟な保育時間等
子どもの成果の質あるいはパフォーマンスの基準	現在の、そして未来の子どもたちの幸せ（well-being）につながる成果	何をもちて成果とするかは、各々の価値観等によって異なる

図 1. 保育の質の諸側面

方法

本研究が最初に取り組んだのは、東京都保育士実態調査の自由記述の分析である。既存の調査であるが、自治体による未分析の大量のデータの価値は高い。都から借り受けた3回（平成25年、30年、令和4年）総計約5万件の回答の自由記述の中から、保育園（保育所、認定こども園、認証保育園）に勤務する保育士の回答、総計22,249件×3設問（「保育士として働くことへの不安、働くために必要な支援」「保育の仕事のやりがい」「希望する研修」）を分析対象とした。分析においては、内容分析とKJ法的アプローチ*を援用した。

大量の自由記述の分析にあたって、「回答全体の傾向を捉える俯瞰的視座を重視する」「意識と背景にある状況・理由が読み取れる記述を選ぶ」「一件の回答に記された複数の内容の全体を理解しつつ分析に適する部分を抽出する」「少数であっても研究目的のために価値ある回答を見いだす」等の分析の視点・作業方針を決めて協同研究者全員と共に読み込み、並行して、テキストマイニングソフト（WordMiner ver.1.5）を用いて、読み込む中で注目したキーワードの文脈の抽出等を行った。

次に実施したのは、保育士へのインタビューとウェブアンケートである。

事前調査として実施した関東近県の保育実践の改革を続ける園長・保育士との語り合いからは多くの学びを得た。ことに、保育士の立場にたって調査をすることの重要性・方法に気付かされた。そこで、保育士の協力を得て「これまでの保育実践を通して心に残っている気づきや学びがあったエピソード」「保育の質を高めるために学びたいこと」を問う二つの設問を作成し、インタビューは東京都の保育士を対象に、ウェブアンケートは関東近県の保育士を対象に実施した。繁忙な仕事の中にある保育士の都合も考慮したが、先行研究を通して意識調査においては二つの方法を併用する価値があると考えた（川池 2020：7-8）。

収集した保育実践エピソードについては、保育士の協力を得て分類し、描かれた保育実践の状況と保育士の意識を概観するに留めた。今回の研究の中心が東京都調査の自由記述の分析にあったこと、設問の意図に沿った内容のエピソードが少なかったこと等がその理由である。以降の研究において調査対象を広げ、質的分析を行う。

「保育の質を高めるために学びたいこと」の回答については概観したが、東京都の調査と同様の傾向にあったこと等の理由から、今回の報告ではとりあげていない。

*KJ法の正規トレーナーの指導を得た方法である。今回はその考え方と方法の一部を援用した。

結果

ここでは、研究結果・成果として、「東京都保育士実態調査の自由記述の分析の結果」、「インタビュー・ウェブアンケートの結果」、「ブックレットの作成」についてまとめる。

1. 東京都保育士実態調査の自由記述分析の結果

保育士 22,249 人の属性を概観すると、勤務する保育施設の運営母体は社会福祉法人、株式会社、公設・公営、公設・民営、NPO 法人と多様であった。性別は 9 割以上が女性、年齢は 20 歳代が全体の 4 割、30 歳代が 3 割、50 歳代以上は 1 割であった。

分析したのは、「保育士として働く不安・支援してほしいこと」「保育の仕事のやりがい」「希望する研修」という三つの設問の自由記述である。

自由記述には、「やりがいはあるけれども、厳しい労働環境の中で多様な不安・不満を持ち続けながら仕事を続けるかどうか悩みながら、よりよい保育をめざして様々な学びを求める」という保育士たちの複雑な気持ちが溢れていた。回答の内容を切断して分類するだけではみえてこない問題の重なりがあった。

(1) 保育士として働く不安・支援してほしいこと

この設問の回答は三つの設問の中でも最も多岐に亘っていたので、保育士たちが指摘した「労働環境の問題」「制度的問題」「働く中での不安・不満」の順に、分類した内容と記述から抽出した関連する文を付して並べ、それらの意識のつながりを示すために典型的な『記述例』を記した。

1) 労働環境の問題：〔不足と過剰・古い風土・格差〕

- ①人手不足：「ギリギリの職員配置」「書類・事務・サービス残業が負担」「休憩時間・休暇が満足にとれない」
- ②シフト勤務が負担：「正職はシフト業務が原則の園が多く、子育て中は非常勤か辞める選択をする人が多い」
- ③昇格の仕組みの問題：「勤務年数だけで昇格が決まる」「昇格すると仕事が大変だから昇格したくない」
- ④女性の割合が高い：「育休や短時間勤務がとりにくく、キャリアを捨てざるをえない」「人間関係が難しい」
- ⑤多様な職員間の理解不足：「ベテラン対若手の意識の差」「常勤と非常勤の役割分担・意識の差」
- ⑥閉鎖的な土壌：「意見が言えない、通りづらい」「上下関係が厳しい」「“圧”やハラスメントがある」
- ⑦長時間預かりの子どもの増加：「人手不足で非常勤職が増える」「子どもも親も保育士も疲れている」
- ⑧保護者対応：「“クレーマー”」「“丸投げ”」「心が折れる・病む・辞めたい」
- ⑨発達特性のある子の増加：「“グレーゾーン”」「手がとられる」「多様な特性の理解・対応が難しい」

2) 制度的問題〔現場の実情との乖離〕

- ①給与の問題：「基本給・時給が低い」「処遇改善がいき渡らない」「公立・民間園、市区町村等の格差がある」
- ②児童福祉法にもとづく「最低基準」の問題：
[保育士配置基準]「気になる子の増加や主体的保育、教育を重視する現在の状況にあっていない」
[設備や構造の基準]「園庭が必須ではないことなど設備・環境は現在の労働/保育環境として不適切だ」
- ③監査や第三者評価の問題：「準備・書類作成が負担」「上辺・形だけである」「現場の困り事を聞いてほしい」
- ④保育士資格の問題：「国家資格なのに評価が低い」「無資格でも働ける」「資格試験のレベルが低い」

3) 働く中での不安・不満〔疲弊・不平等感〕

- ①生活への不安：「手取り・時給が低い」「サービス残業等のためプライベートがない」「家庭との両立が困難」
- ②将来への不安：「子どもの教育資金、老後資金が貯められない」「体力がいる仕事を定年まで続けられるか」
- ③心身の疲労：「“心”を使う仕事」「身体疲労やお金の心配が心に響く」「病んで退職する人が周りに多い」
- ④専門職としての不安：「『理想とする保育』ができない」「『保育の質』向上が難しい/ストレスとなる」
- ⑤保育士資格への不満：「資格があっても低い時給」「無資格の職員も同じ仕事をするなら資格の意味はない」
- ⑥職員・保護者との“対立”の理不尽さ・辛さ：「上司の対応がきつい」「保護者の要求は理不尽だ」
- ⑦孤立感：「給料も低く、忙しくてピリピリとした雰囲気になると人間関係も悪くなりやめていく人が多い」
- ⑧社会的に評価されない不満：「子どもと遊んでいるだけ」「(女性なら)誰でもできる仕事」と思われている

【記述例】

○子どもたちの命を預かり、彼らの成長を近くで見守る仕事は決して簡単なものではありません。国からの手当など改善されたとしても、まだまだ命を預かる仕事に見合うほどのものではありません。無資格者の力を借りてもいっぱいいっばいで、ギリギリの状態でシフトを回しています。

○11～13時間開所するのに保育士配置基準に保育時間が加味されていない。ライフステージの変化の影響を受けやすい女性が多いのに働き続けられる環境整備が不十分である。医者と同じように命を預かり、教師と同じように教育する職業にも関わらず、非常に軽んじられているように思う。

○保育士が自分の働く環境に満足をしていないと質の良い保育などできません。この仕事に誇りをもちたいと思っていますが、今の保育所環境や賃金では本当に難しいです。子どもが好きでこの仕事をしている人が多いのに、自分の子どもを犠牲にしなくては働きません。私は職場の劣悪な環境で、お腹の子どもを1人亡くしました。保育士をもっと大切に、働きたいと思える環境を整備してください。

(2) 保育の仕事のやりがい

7つの分類に記述の一部を付して示す。④～⑦は記述内容の特徴を明示するために【記述例】をあげる。

- ①子どもの成長に対する喜び：「日々の子ども達の成長を目の当たりにすると幸せな思いになります」
- ②保護者からの感謝：「1日の終わりに「ありがとうございました」とか「安心して預けられる」と言われる」
- ③自分の成長につながる：「子どもから学び、保護者との信頼関係を築き、人間としての自分が成長できる」
- ④やりがいがある保育の仕事の価値：やりがいに保育職の価値を見出す捉え方
- ⑤やりがいへの拒否感：保育の仕事にやりがいを強調することを批判する記述
- ⑥“やりがい葛藤”：やりがいと仕事のきつさの中で葛藤しながら仕事を続けている記述
- ⑦保育職に対する自負や誇り：「保育職アイデンティティ」の意識の一端がみえる記述

【記述例】

④子どもの変化を一番近くで見られる。一日として同じ日はなく、毎日が違うことが、自分を豊かにしてくれる。お金には代えられない何かが自分の中にできていく。

⑤給料が低くても、サービス残業しても、家に仕事を持ち帰って遅くまでやっても、保護者から文句を言われても、配慮児で手を焼いても、やりがいがあるから我慢しろというのですか？

⑥子どもが好きだから続いているがツライ、キツイと思うことは多い。休憩する時間もなく、持ち帰りの仕事も多いので、休みの日も仕事をしないと追いつかない。ただ、子どもたちの成長、反応を見るなかでやりがいを感じる瞬間は多いので、大変だしキツイと思っても辞めたいと思うことはない。

⑦命を預かる者として子どもと保護者と信頼関係を築き、日々の子どもの姿から成長過程を見極め、安全に配慮して保育を続けることは大変だが、保護者、子ども、職員と共に子ども達の成長を喜びあえて嬉しい。

(3) 希望する研修

回答の大多数は、例えば救命救急、衛生管理、子育て支援等、多様な保育実践に必要な知識・実技への希望であった。ことに「保護者対応」「発達障害、発達が気になる子」に関する研修希望が多かった。

研修の方法に関する要望もあった。その一つは、保育士試験による資格取得者の要望である。その中には中高年の資格取得者、パートタイム職も多く含まれていた。養成校卒業生と同程度の割合で勤務している人たちが、体系だった学びの不足に加え、不足を補う保障が十分ではないということである。「多忙な職場環境、費用負担、勤務形態」等の理由で「研修に行けない」という記述も少なくなかった。また、他の専門職や一般企業の人たちとの学び合いを求める意見もあった。平成4年調査では、オンライン研修の活用への希望が多かったが、内容によって対面研修を求める意見もあった。一人だけが記述していた回答の中で重要だと思われた記述を次に記す。

【記述例】

○子どもを尊重するためには、どんなことをしたらよいのか、子ども達を見守るとはどういうことか、日々の忙しさの中でどう取り組んでいったらいいか、意見交換をしたい。

○保育、子、親、地域を取り巻く環境は時代と共に変化しています。社会の変化や「今」求められている保育のあり方、保育の社会的役割について学びたいです。

○実技や経験は土台が出来上がればいくらでも上積みできます。保育実践関連の研修だけではなく、女性が多い職場なので、結婚、子育てをしながらでも働き方を考えられるようなキャリア維持のための研修を行ってほしい。法律や制度をもっと学びたい。

2.インタビュー・ウェブアンケートから得たエピソードの概要

ウェブアンケートでは194名、インタビューからは21名の回答を得た。それらエピソードを「子どもとの保育実践エピソード」「職員間、保護者、地域とのつながりを描いたエピソード」に分けて、エピソードの概要とエピソード例（その一部分）、実践の特徴とそれにまつわる保育士の意識の概要を記す。

(1)子どもとの保育実践エピソード

1)エピソードの概要

保育士たちは、子どもの様子や表情をみて見守ったり、穏やかな笑顔で子どもの言葉に耳を傾けて気持ちを理解していた。子どもの思いに接し、どこまで許容するか等の判断には難しさもあることが示されていた。多様な特性をもつ子どもとの関わりでは、子どもたちの気づきを促す態度や環境を大切にしたいインクルーシブな保育を行っていた。発達特性が強い子や外国籍の子どもを中心に描いたエピソードには、配慮がより必要な子どもたちの気持ちだけではなくクラスの子どもたちの気持ちも理解し大切にしていた。日常的な保育よりも運動会などの行事や自然の中での活動、卒園にまつわるエピソードが多かった。描かれた子どもに関しては、発達の気になる子や障害をもつ子のエピソードが多かった。

【エピソード例】

①入園1ヶ月のAちゃん、緊張しているのかなあ、寂しいのかなあ、園庭でお友だちの様子をじっと見えています。少し見守っていましたが、声をかけて2人で近くの畑に行ってみることにしました。歩いている後ろ姿がワクワクしているような嬉しいような。そしてAちゃんが見つめる先にはタンポポが。遠くから優しく「ふー・ふー」するAちゃん。なんだか優しい空気が流れた瞬間でした。

②2歳児クラス、夕方、園庭から部屋に「入らない」という子がいて。「自分で帰ってこれる？」って言うと、「行ける、自分で行ける」と言うんです。でも、ちょっと信じられないから、陰に隠れてみていたんです。暗くなり始めて『やっぱりダメかなー』とか思っていたら、15分ぐらいで周りキョロキョロって見て部屋に入ってきたんです。『何かしらの思いがあったんだろうな』『自分で動けるんだ、2歳って』って、すごく自分の心の中に残りました。

③電車が大好きなAくんは、お友だちとの関わりがじょうずではなく、いつも私のそばにいます。Aくんと他児との関わりを広げたいと思い、電車の本や路線図を本棚にそっと用意しました。翌日それを見つけたAくんは大興奮。自由画帳に線路や駅、電車を描き出しました。周りの子が「何描いてるの?」と聞くと目を輝かせて「これは〇〇を走る〇〇系電車」などと答えるので、みんなもワクワクして一緒に描き出しました。その日を境に、Aくんとお友だちとの関わりがぐんと増えました。

2)実践の特徴と保育士の意識

「子ども主体の保育」の実践例が多かった。近年の保育所保育指針の改訂により「一斉保育から子ども主体の保育へ」という保育理念・方法が重視されるようになったことがその背景にある。保育士の「子どもの〈声〉をきく」ことを重視する実践のエピソードの中に、「保育に主体的に向き合う意識」が読み取れるエピソードが感じられた。それらのエピソードからは、保育士が担う保育実践全体の「起点」と考えられる高い専門性と、仕事に対する「自負」や「自信」といった「保育職アイデンティティ」に連なる意識があった。発達の気になる子のことを取りあげたエピソードの中に、それらの意識が明確に見出されるものもあった。

行事のエピソードには、「達成感」がより濃く描かれており、設問で意図したことが十分得られなかった。

(2)職員間、保護者、地域とのつながりを描いたエピソード

1)エピソードの概要

「職員間のつながり」に関しては、園長、ベテランも補助のサポーター、非常勤、常勤職も“フラット”な関係を大切にす園、先輩からの学びを求める保育士の話、「保護者とのつながり」では、子どもの成長の様子を喜びをわかちあったり、保護者から感謝されたこと、保護者対応が難しく、上司や子どもたちに支えられてのりきったといった事例、「地域とのつながり」としては、子どもの保育に地域の専門職の協力、地域の人たちとの日常的な関わり、お祭りなど単発的な関わり等のエピソードがあった。全体的によりよい関係の中で保育実践が支えられたという状況が多く描かれていた。

【エピソード例】

- ①一年目は保護者の対応もうまくできず、保育も余裕がなくいっぱいいっぱいだったけれど、うちの園には心理士がいるので、話を聞いてもらえて心強かった。子どものこともよくみているから、保育で悩んだ時にも「子どもたちはどういう気持ちでそうになっているんだろう」って一緒に考えてくれる。
- ②保護者は人生経験も環境もいろいろだから、いろいろな考え方があってあたりまえです。お叱りやクレームをいただくこともよくありましたが、学校を卒業してすぐここで勤め始めたので、“世間”というものを保護者から教わった気がします。保護者の中には、ここの先生になった人が何人かいます。子どもを預けた園に勤めたいと思ってくれることは嬉しいです。ここで3年間サポーターとして保育補助をしながら実務経験を積み、保育士資格をとった人もいます。昼休みにピアノを練習している人もいました。子育てしながら勉強して勤めている人はすごいと思いました。保育の現場で学んでいる人を見る事は自身にとっても刺激になりました。
- ③地域の人たちが園のことを知ってくれてからは「干し柿ができたから持って行くよ」と電話くれたり「〇〇が採れたからおいで」と言ってくれたり。散歩に行くと縁側でおばあちゃんからお菓子や漬物をいただいたり、畑でござパーティーしたり、全部、先生たちが作ってきた“つながり”です。

2)実践の特徴と保育士の意識

職員間・保護者・地域の関係を通して保育実践が支えられる“つながり”は、保育士の「保育実践の質」、「居場所感」や仕事への自信・自負を高め、保育職アイデンティティの醸成につながるのではないかと考えられた。

3,ブックレットの作成

自由記述の分析結果とインタビュー・ウェブアンケートから選んだ保育実践エピソードを構成してブックレットを作成した。

研究成果を通して「保育士の仕事の価値と課題」を発信するという意図をもって、やわらかなわかりやすい言葉を使い、子どもと保育士の写真を掲載すること、章立てにおいては、“微笑ましい”エピソードからスタートし、厳しい労働環境の課題を含む自由記述分析は後ろのほうに配置することにした。

そこで、まずは、「手に取って読んでもらう」ことをめざして、目的をイメージ化した図2：表紙と、裏表紙を作成した。表紙をあけた最初のページに「保育士のことば」：保育職の使命や自負を記した文章（自由記述から抽出）を配した。そして、第Ⅰ章には「子どもの〈声〉をきく」ことを大切にした保育実践のエピソードを10篇、「子どもの心の内を知る」「子どもの気持ちに寄り添うということ」「多様な子どもたちと共に」という三つの節に分けておいた。第Ⅱ章には「おとなのつながり」として「多様な職員と保育士がつながる」「保護者がつながる」「地域とつながる」の3節に、前章と同じく、10篇載せた。第Ⅲ章には、東京都保育士実態調査の三つの設問の回答の分析結果の概要を書いた（図3：目次）。

全体をまとめるために、色合いの異なる三つの章をどうつなぐか考えあぐねた時、Ⅰ章の「保育実践」をⅡ章の「おとなのつながり」が支え、Ⅲ章の「労働環境/保育士の意識/研修等学びの環境」が土台となる、という三層構造がみえてきた。

そこで、三層と夫々の層においた三項目には、ブックレットの章や節の名称を参照しながらも新たな名称をつけた。三項目には研究成果を通して得た重要な事柄をキーワード・キーフレーズとして付けた。そうして可視化されたのが「保育実践を支える三層の構図（図4）＊」である。

＊ブックレットに掲載した図の名称は本稿において一部変更した。

子どもと共に輝く保育士

—保育士の〈声〉に耳を澄ませて—



図 2. ブックレットの表紙

保育士が遍く、いきいきと働くことができる環境が用意されるようにと願いをこめて表題を名づけた。
その象徴となるような〈保育士の語り〉と共に提供を受けた写真を掲載している。

表紙	保育士の語り	その1：お散歩が“海”を探す大冒険になった！
はじめに—保育士の仕事にスポットライトをあてたい *保育士のことば（東京都保育士実態調査から）		
第Ⅰ章 子どもの〈声〉をさく—みる さく 感じる 気づく 知る 待つ：共感/尊重/理解…		
1 節	子どもの心の内を知る	エピソード4篇「イヤイヤっ子と一緒に寝ころんでみた」など *エピソードから考える：子どもとわかりあう喜び
2 節	子どもの気持ちによりそうとは	エピソード3篇「年長に進級、子どもたちの気持ちが揺れた時」など *エピソードから考える：「子どもに徹底的に寄り添ってみよう」という覚悟
3 節	多様な子どもたちと共に	エピソード3篇「電車大好きっ子からクラスの遊びが広がった」など *エピソードから考える：保育園はもともと多様性に富む場 保育士の語り その2：発達特性の強い子どもたちを理解するには その3：20歳になった頑固君との再会
第Ⅱ章 おとながつながる—あわせる わかちあう むすぶ わける：協働/連携/信頼関係…		
1 節	多様な保育士と職員がつながる	エピソード3篇「多様な立場の職員が力をあわせる」など *エピソードから考える：保育士が縦と横につながる
2 節	保護者とつながる	エピソード4篇「保護者とわかちあった感動」など *エピソードから考える：保護者とつながるには
3 節	地域とつながる	エピソード4篇「地域の木工さん、設計士が応援してくれた」など *エピソードから考える：子どももおとなも園も地域に生きる
第Ⅲ章 保育士がはたらくということ		
1 節	保育士の仕事の〈やりがい〉	2 節. 保育士の研修への希望 3 節. 働く環境—働く不安とほしい支援
◆調査の基本データ		
まとめとして—ピラミッド型の「保育実践」の図と共に		
保育士の語り その4：子どももおとなも主体的な保育 裏表紙 保育士の語り その5：心に残った子どもたちの〈ねざらいの握手〉		

図 3. ブックレットの目次

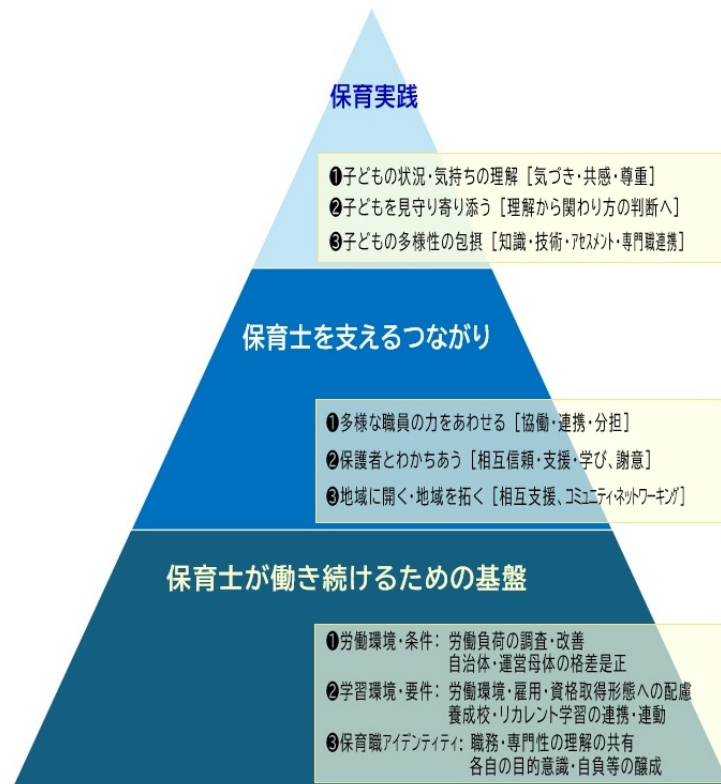


図 4. 保育実践を支える三層の構図

まとめと課題

本稿のまとめにあたって、【研究目的はどこまで達成されたか】、ということに答えなければならない。膨大な自由記述と奥深いエピソードを読み込む中で、しばしば袋小路に迷いこんだ。そのたびに道をさし示してくれたのが、「保育士の〈声〉」、記述やエピソード、協力園の保育士の言葉であった。

そこで辿り着いたのが、本研究のまとめにあたる「保育実践を支える三層の構図（図4）」である。

トップの「**保育実践**」が「保育の質」向上のための最も重要な要素であること、それを直接支えるのが、二層目、職員間の関係、保護者との関係、地域との関係という「**保育士を支えるつながり**」であり、三層目の「**保育士が働き続けるための基盤**」、よりよい労働環境・条件/学習環境の充実/保育士の保育に対する主体的な意識等で醸成される保育職アイデンティティが全体を支えるという構図は、現段階における「研究目的」に応えるものであり、『構造の質』における「人的環境」の要素の構成を示唆している、という結論に達した。

研究目的の完遂を目途に、「三層の構図」を仮説として分析を深めることが次なる研究課題である。

そのために、これまで得たデータをさらに深め・整理し、必要とする新たなデータの収集・分析を加えていきたい。本研究と並行して続けている保育職と隣接する専門職の労働環境と意識の調査との相対化も視野にいれたい（川池ら 2022,2023b）。

目指す方向が見え始めてきた段階で今回の研究は終了となる。まだ道半ばである。泰斗のように「渾沌をして語らしめる（川喜多 1996）」ことは極めて難しい。が、大量のデータや何気ない保育の日常を描いたエピソードに向き合う中で様々な気づきがあったことも、大きな成果であった。

たとえば、**自由記述**からは、“心”を使う仕事だからこそ“心”が擦り減る疲弊への無理解/支えられるはずの“おとなのつながり”が“対立”と化して募る孤立感/女性が多い職場なのに、皮肉にも多いために女性の子育てを両立させて働くための制度が利用しにくい、といったことであったが、他方、どんな状況の中でも子どもの成長に喜びをもってあたる保育士の高い専門職意識、自負にも気づかされた。

保育実践エピソードからは、質の高い保育実践の中にある子どもと保育士の“心”のつながり/保護者との子どもの成長の喜びの“わかちあい”や保護者からの“謝意”が仕事への自負に資すること/園内外での“居場所感”が「仕事への自信や意欲」につながる事/などに気づかされた。それらの保育士の意識は「保育職アイデンティティ」に近いものであった。

研究方法に関して気づかされたことは、意識調査の分析においては、当事者の気持ちを理解するために共感性も必要であるということ、理論に裏打ちされた知と感性と道具（テキストマイニング）を適切に使わなければならない、ということであった。

これらの“気づき=発見”をどのように活用するか、その方法の考究もこれからの研究課題となる。

ところで、保育をとりまく環境には昨今、大きな変化の兆しがある。処遇改善や最低基準の改訂も進められている。他方、保育施設の定員割れ、保育者志願者の減少、「誰でも通園制度」の開始など難しい課題も生じている。「保育の質」「保育士の労働環境の質」の向上のためには、実践者と研究・教育・政策・地域の連携・協働が必要ではないかと考える。

写真にあるような、子どもたち・保育士たちの微笑みが今・未来の私たちの社会に希望をもたらししてくれるような気がする私たちは、それら協働に参画しながら研究を続けていきたいと思う。



図 5. 子どもと共に輝く保育士（本研究への提供写真）

■謝辞

本研究に助成を賜りました公益財団法人 三菱財団の理事様方・審査員の先生方、事務局のスタッフの方々、貴重なデータの利用をご許可いただきました東京都福祉局子供・子育て施策推進担当部長様、調査協力園の園長先生、保育士の先生方、すべての皆さまに、深く感謝申し上げます。

■追記

本研究は、鶴見大学短期大学部倫理審査委員会の承認を得て実施しました。

協同研究者の氏名と所属は以下のとおりです。

阿部 真美子（山梨県立大学・聖徳大学名誉教授）、飯塚 美穂子（鶴見大学短期大学部保育科）、祓川 摩有（聖徳大学教育学部児童学科）、樋川 隆（一般社団法人 山梨子どものあした）、根岸 洋人（高崎健康福祉大学健康福祉学部）、金 瑛珠（鶴見大学短期大学部保育科）、濱中 啓二郎（鶴見大学短期大学部保育科）長宗 武司（新見公立大学健康科学部）

※ブックレットの入手ご希望等の連絡先 care.e.l.0130@gmail.com

（完）

発表論文等

- 1) 飯塚美穂子・濱中啓二郎・金瑛珠（2026）「『保育の専門性』・『保育の質』向上を目指す『研修』のあり方に関する一考察 ―東京都保育士実態調査『自由記述』の分析を中心に―」『鶴見大学紀要 第3部 保育・歯科衛生編』第63号,1-10.
- 2) 川池智子・阿部真美子・飯塚美穂子・祓川摩有・樋川隆・根岸洋人・長宗武司・金瑛珠・濱中啓二郎（2026）『子どもと共に輝く保育士－保育士の〈声〉に耳を澄ませて－（第55回 公益財団法人 三菱財団 研究助成 ブックレット）』.

参考文献

- 1) 秋田喜代美・阿部真美子・一見(鎧屋)真理子・門田理世・北村友人・鈴木正敏・星三和子（2019）『OECD 保育の質向上白書:人生の始まりこそ力強く:ECEC のツールボックス』明石書店.
- 2) 川池智子（2025）「少子社会中的 “少子化対策/育児支援”」（罗鵬・川池智子・杨一帆主編（2025）『福利制度視野下の 少子高齢化应对：日本实践与中国实践』、中国社会科学出版社）109－123.
- 3) 川池智子・飯塚美穂子・阿部真美子（2023a）「保育士の労働/保育環境とプロフェッショナルリティに関する研究－東京都保育士実態調査の自由記述データ分析を手がかりに―」『九州社会福祉学年報』13・14,63-74.
- 4) 川池智子・綿貫恵子・樋川隆・根岸洋人・加藤稔子・川池秀明・長宗武司・佐々木さち子・川池秀明（2023b）「〈ケア労働〉のヴァルネラビリティと価値に関する実証的研究(2) -障害者支援/ケア専門職の“仕事観”：みずほ福祉助成財団助成研究から-」『鶴見大学紀要 第3部 保育・歯科衛生編』60,43-55.
- 5) 川池智子・綿貫恵子・戸田京子・樋川隆・川池秀明（2022）「〈ケア労働〉のヴァルネラビリティと価値に関する実証的研究(1) -保育士のテキストデータ分析を中心として-」『鶴見大学紀要 第3部 保育・歯科衛生編』59,43-55.
- 6) 川池智子（2020）『〈依存労働〉としての子育てと社会的ケア：乳幼児/障害児の親が求めるもの』学文社. [平成30年度 日本学術振興会研究成果促進費 JSPS 科研費 JP19HP5171]
- 7) 川池智子（2005）「「子育て・子育て支援」をめぐる保育政策の課題（その2）：山梨県内2地域の保育士会保育者への調査を通して」『山梨県立女子短期大学紀要』38,47-60.
- 8) 川喜田二郎（1996）『KJ法：渾沌をして語らしめる』中央公論社.
- 9) 川嶋みどり（2024）『増補版 看護を語ることの意味 “ナラティブ” に生きて』看護の科学社.
- 10) Kittay, Eva Feder. *Love's labor : Essays on women, equality, and dependency*. Routledge, 1999 (= 2010, 岡野八代ら監訳『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社).
- 11) 近藤孝司（2023）「対人援助職における「やりがい」の構成概念に関する系統的レビュー」『上越教育大学研究紀要』43,239-248.
- 12) 近藤幹生・幸田雅治・小林美希 編著（2021）『保育の質を考える－安心して子どもを預けられる保育所の実現に向けて』明石書店.
- 13) 鯨岡峻・鯨岡和子（2009）『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房.
- 14) 箕輪明子（2021）「保育労働の実態と課題（特集：社会福祉の現場における職員の働き方）」『日本の科学者』56(4),17-22.
- 15) 中坪史典編著（2016）『テーマでみる保育実践の中にある保育者の専門性へのアプローチ』ミネルヴァ書房.
- 16) 中納美智保（2018）『キャリア初期看護師の職業的アイデンティティの形成プロセス:看護実践の経験の意味づけから』風間書房.